

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
April 2017

No.24 【特集】 多文化社会へ向けて

多様な文化環境をルーツに持つ人々が、同じひとつの社会のなかで生活をともにしていく。違いを認めつつも差別のない、誰もが暮らしやすい社会をつくるために、私たちにできることは何だろう。本号の特集では、豊かな多文化社会の実現に向けてそれぞれの現場で活動する人々の生の声に耳を傾けてみたい。

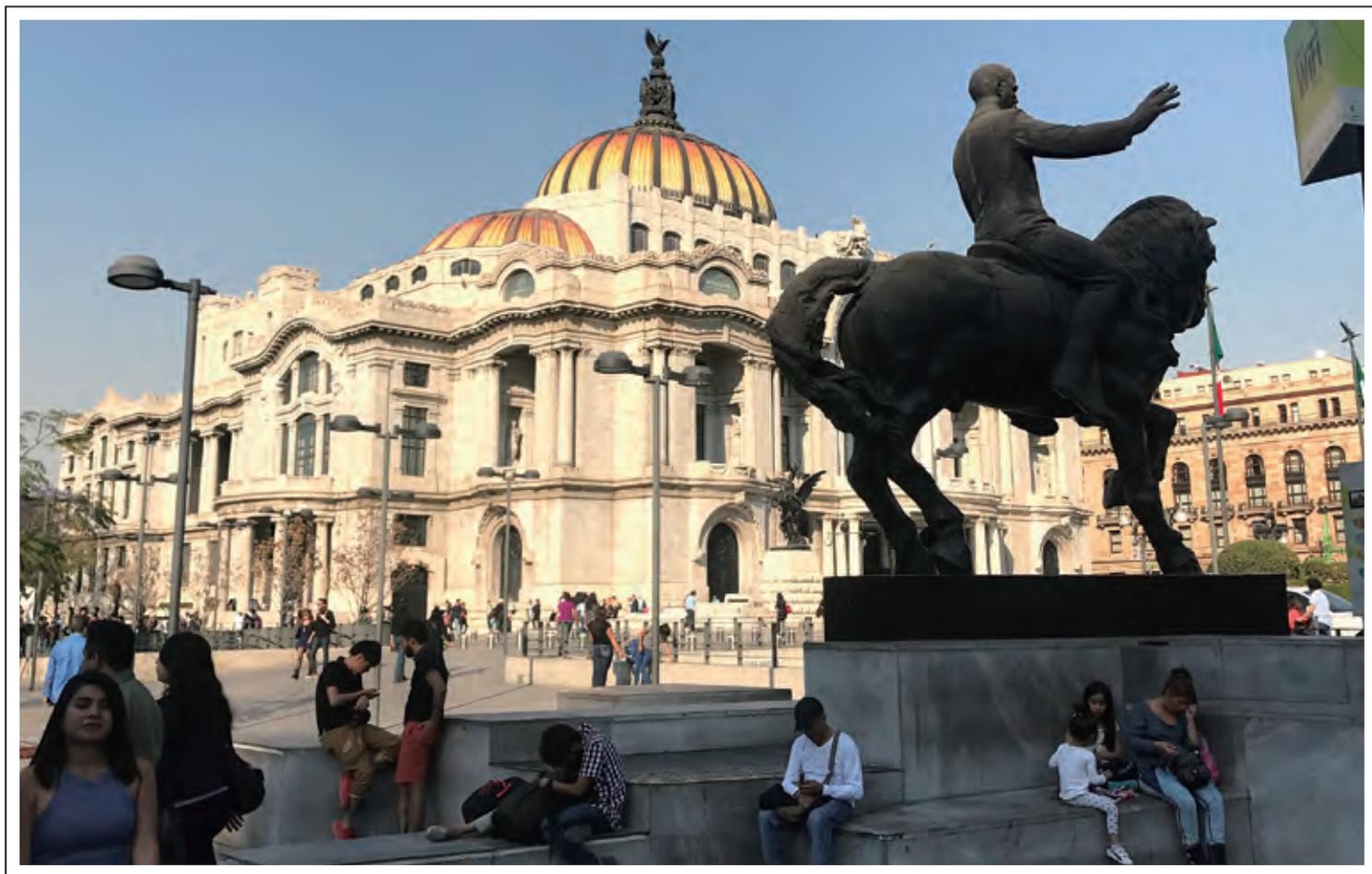




Photo by Hideo Tone

出張で訪れたメキシコシティの中心にあるアラメダ公園には、スペイン植民地時代の豪壮なベジャス・アルテス宮殿がありました。現在のメキシコの国民は、メスティーソ(スペイン人とインディオの混血)が60%、インディオが25%、白人が14%とのことで、メキシコも「多文化社会」なのだと思います(本誌 P.28参照)。

CONTENTS

FIRST WORD ● 遠山敦子

2017年度によせて …… 2

特集：多文化社会へ向けて

座談会 ● アニサ × クリント × 董 × ダニカ / 牧野佳奈子

日本で暮らすってどうですか? …… 4

私たちの取り組み — 助成対象者からの寄稿

国内助成プログラム ● 木下貴雄 [王榮]

異文化“介護通訳” 外国人高齢者と介護の橋渡し役 …… 9

研究助成プログラム ● ティティマディー・アーパッターノン

多文化を受容し敬意を払うことに重点を置いた教育を …… 11

国際助成プログラム ワークショップ&シンポジウムレポート ● 原めぐみ

なぜ私たちは他者を支援するのか? …… 14

国際助成プログラム 特別寄稿 ● 山崎一人

つながれ! 多文化共生の学校へ街へ …… 16

2017年度 事業計画 …… 18

研究助成・国内助成プログラム

2016年度 プロジェクト一覧 …… 21

「私」のまなざし ● 橋本栄莉

南スーダン難民がつくる新たな「故郷」のかたち …… 24

お茶っこ通信 第五回 ● 加賀 道

鍋と漬物から見えること …… 26

トヨタ財団ジャーナル …… 27

2017年度によせて



公益財団法人 トヨタ財団理事長
遠山 敦子

もあります。世界の状況が不透明さを増していることは確かです。そのような情勢であればこそ、日本人が自ら培ってきた智慧を振り所として、国内外の課題に取り組むことが肝要と考えます。それがまた国際社会の側からの日本に対する期待と信頼に込める方途となります。当財団も、—むろん身の丈に合ったものですが—この課題への取り組みの一翼を担いたいと思います。

トヨタ財団の助成プログラムの三本の柱という軸は、2017年度においてもぶれることはありません。学術研究を介して、社会の新たな価値を創り出すことを目指す研究助成プログラム、域内の交流・協力によって、アジアの共通課題を解決しようという国際助成プログラム。そして、「業(なりわい)」という切り口から、日本の地域社会での持続可能なコミュニティづくりを目指す国内助成プログラムです。いずれも、重要なテーマです。現場で研究や活動に取り組まれる助成対象団体と財団プログラム・オフィサーとの二人三脚で、良いモデル、良い事例という成果が生まれることを切に期待します。

もう一つの取り組みとして、2016年度より、NPOの皆さまに、トヨタ自動車の問題解決手法をお伝えする講座「トヨタNPOカレッジ『カイケツ』」を、トヨタ自動車のご協力の下、開講しています。トヨタ自動車が培ってきたノウハウをNPOに橋渡しするという、意義深い試みであり、今年度も引き続き実施いたします。このような従来の助成活動の範疇に収まらない、新しい取り組みにも積極的にチャレンジしていきたいと思

います。という意味です。私どもも、常に新たな心持で、社会の動きを見つめ、「人間のより一層の幸せ」、「社会の発展」に資するよう努めてまいります。引き続き、皆さまの温かなご指導とご鞭撻をお願いいたします。

頃より、私どもトヨタ財団の活動につきまして、ご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。2017年度の冒頭にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

昨年度のさまざまな出来事の中でも、とりわけ、イギリスとアメリカの有権者が下した決断に、時代の変わり目となる大きな変化というものを感じます。翻って、我が日本はどうでしょうか。日本の思想や文化の歴史に思いを馳せると、一つの美質に気が付きます。それは、寛容で包摂的であるということ。飛鳥朝から奈良朝にかけて、仏教が日本に伝来した時も、紆余曲折がありながら、神仏習合(混淆)という柔軟な思想で、日本古来の信仰と外来の仏教の間うまく折り合いをつけています。また、下って江戸期においても、国学、儒学、蘭学というそれぞれの母体となる宗教や世界観が異なる、当時の有力な三つの思潮が、ヨーロッパの宗教間やイデオロギー間の対立の例にみるような、激烈な争いを繰り広げるといふことはありません。このような日本人の智慧があつてこそ、この海に囲まれた島国の中での決定的な対立を避けることができたのであり、長い時間の中で養われた固有の伝統が破壊されることもなかったのです。

冒頭で述べた、時代の変わり目、大きな変化の内実には、排他性、不寛容さといったものを感じます。かつては多様性や寛容さを重んじていた欧米の先進諸国に、この風潮が広がっているのは気がかりなこと。さらに、この動きが、日本を取り巻く近隣諸国にどのように跳ね返ってくるのかも注視する必要があります。

古 代中国の殷の湯王が、洗面の器に彫りつけ、自らを戒めたとされる「苟(まこと)に日に新たに、日(ひ)日に新たに、又日に新たに」という言葉があります。「毎日が新たなものと考えることによって、過去の延長という惰性に、日常が陥らないように」



● 牧野佳奈子(まきの・かなこ)

多文化市民メディア DIVE.tv 代表。地方テレビ局の報道記者を3年勤めた後独立。フォトライターとして国内外取材し、各地の文化・生活・地域づくりなどをルポ。2015年にインターネット動画サイト DIVE.tv を立ち上げ、愛知県内に住む外国人ルーツの人の文化や生活を発信している。



Clint Hil
クリント・ヒル

Anisa Padang
Pelangi
アニサ・パダン・ペランギ

【特集】多文化社会へ向けて

多様な文化環境をルーツに持つ人々が、同じひとつの社会のなかで生活をともにしていく。

違いを認めつつも差別のない、誰もが暮らしやすい社会をつくるために、私たちにできることは何だろう。本号の特集では、豊かな多文化社会の実現に向けて、それぞれの現場で活動する人々の生の声に耳を傾けてみたい。



場所：グローバルカフェ (愛知県名古屋市)

写真撮影：マルソン

日本で暮らすって どうですか？

現在、日本に住む外国籍の人は238万人以上(2016年12月末時点)。留学生、労働者、日系人、配偶者などさまざまな背景の人たちが、それぞれの経験と想いを積み重ねながら暮らしています。

一体どんな「経験と想い」を持っているのでしょうか？それは果たして共通している？それとも出身や背景によって違うもの？

東京に次いで外国人の人口が多い愛知県で、4人の男女に話を聞きました。まさに「ぶっちゃけ多文化トーク」炸裂です。

日本を選んだというより、選ばれた

牧野 今日はみなさんに日本での経験や思いについて語ってもらいたいと思います。それぞれ背景はさまざまだと思いますが、どうして日本を選んだのか？から教えてください。

クリント 僕は選んだというより、日本に選ばれた気がします。アメリカの大学で選択必修科目だった語学(ドイツ語、スペイン語、中国語、韓国語、日本語)のうち、日本語だけが1年間の留学を条件にしていました。他の言語で興味のあるものがなかったため、思い切って留学することにしました。

董 僕も日本に選ばれた感じですね。特に日本のアニメやゲームが好きだったわけじゃなくて、父に「日本語じゃないと学費を出さない」と言われたんです。本当は地元で美術系の大学に進学したかったのですが、



董博文
トウ・ハクブン

Danika Irish
Autentico Papaya
ダニカ・アイリッシュ・アウテンティコ・パパヤ

だけ先に来日し、仕事と家を見つけた。私が生まれたダバオ市には日系フィリピン人がたくさんいるので、日本の文化や言葉を学べる学校(フィリピン日系人会インターナショナルスクール)も幼稚園から大学まで整っています。私も日系人として生まれたことに、とても感謝しています。ただ学校では日本語をあまり勉強しなかったため、今になって後悔していますが。

日本語はゲームみたい

牧野 日本語はやはり難しいですか？
クリント そんなことないですよ。どの言語にもパターンがあるので、パズルのように覚えるだけです。

アニサ でも漢字は難しいですよ。私は日本のドラマが好きなので、いつもメモ帳とボールペンを持ってテレビを見ていました。新しい単語や文法を書き留めて、会話の中でどう使うのか覚えるためです。

董 どんなドラマが好きなんですか？
アニサ 最初は『恋空』とか。
アニサ 『恋空』アジアではどこでも有名だよ。『恋空』そう、まずは『恋空』。でも最近久しぶりに見たら恥ずかしくなっちゃって。実はちょっとチャライよね(笑)

ダニカ 私は近くの日本語教室に行ったことがあるんですが、続きませんでした。一緒に勉強する人のレベルがバラバラなので、モチベーションが上がらなくて。平日は仕事が忙

日本人はすごく優しい！けど……

牧野 日本に来てイメージと違っていたり驚いたことはありませんか？

ダニカ まず電車やバスが時間通りに来ること。5分遅れただけで駅の人が謝ってくれるとか。あと四季の変化にも驚きました。

アニサ インドネシアも一年中夏なので、最初の2年間は体が慣れなくて大変でした。でも私はブーツが大好きだから、冬はあった方がいい！

クリント 僕は初めて日本に来た日、セントレア空港の荷物受け取り場にパスポートを置き忘れたんですよ。しまったと思って探しに戻ったら、ちゃんと同じ場所にあった。日本は平和だね、と心から思いました。

董 日本人は本当に親切ですよ。中国では日本のことを悪く言う人もいますので、1人で来日した時すごく怖かったです。でも道に迷った時や街で自転車の鍵をなくした時、知らない人に本当に親切に助けてもらって。本気で「この人は神様だ！」と思いました。

ダニカ 私も最初は怖かったけど、職場でい

★恋空(こいぞら)：2005年から執筆が開始された美嘉によるケータイ小説を元にしたテレビドラマ。書籍化、漫画化、映画化などもされ、若い女性を中心に日本国内だけでなくアジアでも人気を集めた。

ろんな人を知って日本人が好きになりました。中には無視したり差別する人もいますが、ほとんどの人は良い心を持っていると思います。

牧野 逆に困ったことはありませんか？

アニサ 病気になった時。あと何かを契約する時。特にビザが1年更新だった時は、携帯電話もインターネットも契約できなくて大変でした。

董 保証人の問題もあるよね。留学生が18歳で来日して「保証人が必要」と言われても、親も親戚もいないからどうしようもない。あと日本の携帯はプランがいろいろありすぎて難しいです。他の国ではSIMカードを買って入れるだけなのに。

クリント 僕が納得いかないのは、アパートを借りる時の礼金ですね。敷金は戻ってくる可能性はあるけど、礼金は戻ってこないでしょう？ それに仲介料も入るとトータルで20万円以上かかる。僕はたまたま貸してくれる人がいたので助かりましたが、そうでなければ本当に困ったと思います。

牧野 自分の国に帰りたいと思ったことは？

クリント ない。

董 ゼロです。

アニサ 私は1〜2回あります。日本語が少し話せるようになったのでアルバイトしようとして面接に行ったら「うちは漢字が読める中国人しか雇わない」と断られたり、面接に合格しても「日本語ができないから」と1日でクビにされたりして……。仕送りもないのに一体どうやって生活したらいいの？と目の前

が真っ暗になりました。でも、それで帰国したら日本に来たことが全部バアになる。大学も卒業していないから良い仕事にも就けないし。それががんばってN1(日本語能力試験1級)を取ったら、今度は友達や先生から次々とアルバイトを紹介されるようになりました。日本ではやはり、証明できるものがないとダメなんですね。

各国の社会的課題は――

牧野 日本は少子高齢化が進み、さまざまな社会的課題が浮き彫りになってきています。みなさんの国にも社会的課題はあると思います。何が一番深刻だと思いますか？

ダニカ フィリピンで一番深刻なのは違法ドラッグです。何千人もの人が違法ドラッグに関わって死んでいますから。2番目は汚職。あと首都マニラでは渋滞や環境汚染の問題も深刻です。

クリント アメリカは……もう言う必要ないですよ。僕は正直、日本に避難してきたような感じです。アメリカは本当に今混乱している。別に毎日暴動があるわけではないけど、差別もひどいし、黒人だから仕事に就けないこともよくあります。日本では、黒人をジロジロ見る人はいるけど直接攻撃するわけじゃない。だから日本に来て僕はちよつと気分が楽になりました。

董 中国ではLGBTに対する差別がひどいですよ。年配の人は仕方ないと思いますが、今は若い人がネットでひどい発言をしていま

おしえて！恋しくなる母国の料理は何？



● Danika Irish Autentico Papaya (ダニカ・アイリッシュ・アウテンティコ・パパヤ)
フィリピン出身、在日歴2年、派遣社員。曾祖父がフィリピンに移住。ダバオ市で生まれ育った日系4世。

カカニン。お米やキャッサバでつくったケーキで、黒糖やココナッツなどいろいろな味があります。フィリピンでは、人が集まれば必ず出てくるお菓子！



● Anisa Padang Pelangi (アニサ・パダン・ペランギ)
インドネシア出身、在日歴4年半、留学生。ジャカルタ市内の高校を卒業後に来日。国際コミュニケーション専攻。

テンペ(大豆をテンペ菌で発酵させたもの)。日本でも売っていますが、すごく高いのでいつも豆腐で我慢しています(涙)。どんな料理にも使えて便利です。



● Clint Hil(クリント・ヒル)
アメリカ出身、在日歴8年、会社員。名古屋市内の大学に1年間留学後、一端帰国。2010年に再来日して英語教師や会社員を務める。

シリアル。日本のシリアルは味も違うし種類も少ないので。最近は特に Honey Comb が恋しいです。この前お母さんが送ってくれたけど、あと1袋しか残ってなくて悲しい……。 (涙)。



● 董博文(トウ・ハクブン)
中国出身、在日歴4年半、留学生。瀋陽(中国東北地方)の高校を卒業後に来日。社会福祉専攻。

スイカ。中国では一番安い果物なので毎日食べていました。日本では高すぎて買えません(涙)。中国の露天商のおばあちゃんが選ぶスイカは、本当に甘くて口の中でとろけるんですよ！



す。アメリカや台湾では法的にも同性婚が認められているのに、中国はそういう面でまだまだですね。

アニサ インドネシアはアメリカと似てるかな。まず宗教の対立。次に民族の対立。特に今はジャカルタの知事選が近いので、毎日ニュースやSNSでコンフリクト(対立、争い)の話題が流れています。インドネシアは国民の80%がイスラム教ですが、今ジャカルタ知事に立候補している有力候補はクリスチャンなんです。しかも彼は過去に汚職の記録がなく、すごくクリーンな人なので逆に宗教のことはかなり攻撃されるの。

多様性は対立を生む？

牧野 一方でインドネシアには300以上の民族や言語があり、日本に比べてとても多様性のある国ですよ。それをプラスだと捉えるか、対立も多くなってマイナスだと捉えるか……。多様性も少なければ対立も少ない日本を、どのように見えていますか？

アニサ 日本はもつと多様になった方がいいと思います。平和すぎると自己意識も薄くなるというか……。インドネシア人は、自分は何者か？自分の民族は何か？といったことをすごく意識しているの、大学生にもなれば自分のことをしっかりわかっていきます。日本人はほとんど同じ背景なので、性格が良いか悪いかという違いしか気にしない。それはちよつと浅いなと思って。もう少し刺激があった方が、平和ではなくなるけどいいん

じゃないかと思っています。

牧野 実際は日本も外国籍の人が増加して、今では238万人以上になっています。今後もっと増えた場合、アメリカのように混乱に陥ると思いますか？

クリント それはならないですよ。

アニサ いや、既になりました。イスラム教の人に対して。私の友達の家にも、ある日突然ポストカードが送られてきて、「アッラーを信じる者はテロリスト。国に帰れ」と書かれてあったそうです。ちょうど断食の時期だったので、モスクに行く時ヒジャブを被っていたのが目立つたのでしょう。私もイスラム教徒ですが、お祈りの時以外はヒジャブを被りません。イスラム教こそすごく多様性のある宗教なので、いろんな考え方やスタイルの人がいるんです。でも知らない人にとっては、みんな同じに見える。

董 確かに東京や大阪では、どこを見ても外国人だらけですよ。日本人がこういう状況を本当はどう思っているのかな、と心配になるくらいです。

ダニカ 子どもの世界も同じですよ。弟は来日してすぐ日本の中学校に入ったのですが、友達に「いじめられて「学校行きたくない」と言うようになりました。彼はその後日本語をがんばって、今では日本人の友達がたくさんいるようなので安心ですが。

クリント でも今はもう誰が日本人か外国人か、パッと見ただけではわからないですよ。特に学校ではみんな制服だし、夏になったらみんな日焼けして黒くなるし。ただ、日本で

はいくら日本語をしゃべれても、国籍を変えたとしても、外国人だと思われると常にゲストのポジションに置かれます。全く同じようにはなかなか接してくれない。でも僕個人としては、それでいいと思う。

アニサ 日本人って壁をつくってるんだよね。**クリント** 完全に壁がある。

牧野 逆に壁で仕切られた方が、壁も何もなくて攻撃されるよりマシということ？

クリント そう、壁があった方がいいです。日本人って、相手が日本人でも基本的に壁をつくるじゃないですか。それで仲良くなったら壁を取る。アメリカでは全然知らない人からも「Hey you」みたいに話しかけられるのが普通だから、油断していると知らないうちに財布を取られたりします。日本ではそういうことがないから、いくら外国人が増えてもアメリカのようにならないと思うし、自分としても住んでいてすぐ落ち着きます。

ダニカ 私も今では日本の方が住みやすいです。フィリピン人はルールを守らない人が多くて、何でも「まあいいや」と適当にする。私も昔は同じでした。とりあえずお金を稼いで好きなものを買おう！みたいな。でも今は家計簿をつけて貯金もしています。お金はありがたいものと思えるようになったし、家族や将来のことも考えられるようになりました。それも全部、日本人の態度や行動を見て学んだことです。

ただ、日本人のお年寄りはかわいそうだなと思う。フィリピンではみんな外に出て会話したりお茶を飲んだりしていますが、日本は



家に引きこもっている人が多いですよね。誰かに話しかけるだけでも躊躇したり遠慮したりして。私は体が弱いのでたまに体調を崩して倒れそうになるのですが、もし1人でいる時に苦しくなったら、誰か助けてくれる人がいるのかなと心配になります。

◆ **どれだけ友達がいっても寂しい気がする**

董 人は誰でも落ち込む時があるじゃないですか。どうすればいいかわからなくなったり。そういう時に日本人の友達に相談しても、アドバイスをくれられないことが多いですね。「かわいそう、つらいよね」と言うだけで。

アニサ そうそう！それで終わりだよ。たとえばインドネシア人の友達に「私ふられちゃった」と電話したら、何時間でも話を聞いてくれて一緒に泣いたり励ましたりしてくれます。でも日本だと「がんばってね。大丈夫だよ」で終わっちゃう。「友達」の範囲が決まってるというか、他人の壁の次には友達の壁があって、なかなかつながり合えてる感覚がもてない。よく「アニサちゃんは喋りやす

くて友達もたくさんいいね」と言われますが、どれだけ日本人の友達がいっても寂しさが常にあります。

牧野 日本人は内向き志向だとも言われ、好奇心やチャレンジ精神がもてない人もたくさんいます。

クリント それは教育の問題です。小さい時から指示されるばかりで、好きなことをやらせてもらえないから。大学で急に好きな授業を選んでいいと言われても、慣れてないからどうしていいかわからない。

アニサ 私も大学に入った時、どうして日本人は自分で選んだ授業なのにこんなにもやる気がないんだろう？とびっくりしました。**董** 日本の青春映画には「チームみんなで甲子園を目指そう！」みたいな感動ストーリーがいっぱいあるのに、現実ではほとんど見たことないよね(笑)。

アニサ あとみんなでレストランに行った時、一人の子がチキンを頼んだら全員チキンにするのにもびっくりしました。私だけ違うものを頼んだら、「チャレンジャーだね〜」って言われて。

ダニカ でも気持ちはわかる。私もシャイだから、一人だけ違うこととして注目されるのは恥ずかしいもの。

クリント まあどの国にも素晴らしい点と残念な点があるからね。それにしても日本人の若い人は、もうちょつとチャレンジャーになってもいいかなと思います。

全員 確かに。

牧野 今日はどうもありがとうございました。

特集
多文化社会へ向けて

私たちの取り組み

—— 助成対象者からの寄稿

「私たち」と「彼ら」の言語や文化の壁を越えて、それぞれがともに暮らすためにできることは何か？

違いを受容し、たがいが敬意を払うことに重点を置きながら、

介護や教育の現場で活動を行う2つの助成対象プロジェクトの報告から、

「多文化社会」の現状や課題、そのあるべき形を考えてみたい。



2014年度国内助成プログラム

「助成題目」日本人も外国人も安心して老後を暮らせる地域社会を目指して

—— 外国人と介護制度をつなぐ3つの試み

異文化「介護通訳」

外国人高齢者と介護の橋渡し役

● 木下貴雄「王榮」

(NPO法人東海外国人生活サポートセンター理事長)

れておらず、介護施設においても受け入れ体制が整っていません。

また、介護保険制度は日本人でさえ理解が難しく、外国人は制度にアクセスすることすら困難な状況にあります。たとえアクセスできたとしても、認定調査やケアプランの説明、サービスの契約にあたっては、日常会話程度の日本語力では理解が難しいです。一方、介護施設では、外国人に対する知識や理解が乏しいため、どう受け入れたらいいのか、どう接すればいいのか、どうコミュニケーションを取ったらいいのかなど、戸惑いを感じている場面も少なくありません。

そのため私たちは、在住外国人の高齢化は今後避けて通れない重要課題として早急に取り組まなければならないと認識し、2015年から2年間にわたり、公益財団法人トヨタ財団の助成を受けて、外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト「日本人も外国人も安心して老後を暮らせる地域社会を目指して——外国人と介護制度をつなぐ3つの試み」の活動を行ってきました。①介護通訳者(中国語)の養成・ボランティア派遣、②外国人への介護制度の周知、③行政・介護施設などの関係機関に対する外国人の介護問題に関する啓発活動、の3つの取り組みがそうです。

◆ **なぜ「介護通訳」なのか**

きっかけは父の介護でした。父の介護を通して、日本語がわからず、読み書きもできない外国人高齢者が介護保険サービスを利用するには、「ことばの壁」があまりにも厚すぎることを痛感させられました。

父、70代、旧満州国生まれの中国引揚者。1980年代に帰国、日本語は日常会話程度、パーキンソン病と認知症で要介護4、身障者

外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト

2016年6月末現在、日本に暮らす外国人の総数は230万7千人。そのうち、65歳以上の高齢者人口は15万7千人。3年前に比べると1万4千人増え、高齢化が進んでいることがわかります。かつてはニューカマーと呼ばれる人たちの高齢化はまだまだ先のことだと言われていましたが、永住や定住の増加に伴い、在住外国人の高齢化はすでに未来の話ではなく、現実味を帯びてきています。今後ますます高齢化が予想されますが、そのための施策は行政においてはまだとら

2級。母、60代、中国籍。日本語は日常会話程度、地域社会との付き合いが薄く、中国で学校教育を受けていないため読み書きができません。

父のパーキンソン病は定年後病状が悪化し、認知症状も現れ、幻覚や幻聴がひどく、徘徊もするようになりました。母が介護する生活が続きましたが、日々の介護に母は体力的にも精神的にも疲れが限界に達しました。母からのSOSを受けて、私は地域包括支援センターに相談し、介護保険サービスを利用することにしました。母は日本語が日常会話程度しかできないため、関係者との面談や介護サービスなどの説明にはすべて私が同席して母に通訳しなければならず、諸契約においてもすべて私が代筆しなければなりませんでした。この時に初めて、通訳なしでは外国人高齢者が介護保険サービスを利用することは不可能と痛感し、同時に、介護保険制度をはじめとする専門知識がなければ通訳もできないと実感しました。



フォロー研修後の記念写真

また、文化や生活習慣などの違いから、デイサービス施設の食事が口に合わなかったり、レクリエーションに戸惑ったり、父のしゃべることばが日本語で

あったり中国語であったりして、施設の職員が戸惑いを感じることも多くありました。そのため、施設の職員などの関係者に父の背景を説明し、理解を求めました。このことを通して、関連機関に対して異文化の背景を持つ高齢者の介護サービス利用に関する啓発が必要だと感じました。

父の介護を通して、日本に住む異文化の背景を持つ高齢者が安心して地域で暮らしていくためには、高齢者及びその家族に対して、介護に関する知識を持ち、言葉や文化に精通する通訳者が、介護保険制度の周知や介護サービスへの橋渡しをして、同時に、行政や福祉機関、介護施設への理解啓発などを行っていく必要があると強く感じたのです。

「介護通訳者」の養成研修・ボランティア派遣

介護通訳は通訳業界において新しい分野であり、介護通訳の定義もなければ、医療通訳のように体系的な養成カリキュラムもなかったため、私たちは介護通訳の「定義」から検討しなければなりませんでした。また、先例がないということで、カリキュラムの作成にあたっては、医療通訳共通基準を参考に、「知識」「技術」「倫理」の3項目に分けて作成し

修も行いました。

2015年度から2期にわたって27名の介護通訳を養成しました。2016年4月にスタートした介護通訳のボランティア派遣は、2017年1月末現在のべ35回に達しました。また、在住外国人への介護制度の周知については中国帰国者を対象とした説明会を実施、さらに複数のイベントに出展し、多言語通訳付きで周知活動を行いました。外国人高齢者に対する理解への啓発については、地域包括支援センターへの個別訪問や、異文化介護シンポジウムの開催などを通じて行いました。2年間にわたって取り組んできたとはいえ、

介護通訳養成研修カリキュラム

大項目	中項目	小項目
知識	要介護外国人を取り巻く状況について	要介護者の生活状況、日本語理解が不十分な要介護者の介護現場での困難な状況などに関する知識・理解
	介護保険制度について	介護保険制度の概要
		介護サービスの利用について(要支援・要介護の認定・サービスの利用方法・ケアプランなど)
		介護施設について(どのようなところか、サービス内容・契約内容、費用など)
		介護施設以外のサービスについて(サービスの種類・内容・費用など)
上記介護保険制度について中国語でまとめる		
高齢者に多い病気について	高齢者に多いおもな病気の概要	
医療と介護の連携について	医療と介護の連携の場面	
介護用語について	介護や介護制度に必要な用語の基礎知識、用語集の作成方法	
技術	通訳技術	ロールプレイなど
倫理	介護通訳者としての心構え	介護通訳の役割・特徴
		通訳者としての倫理
		介護通訳者に求められるもの

※他に現場研修(施設見学、体験、施設内における通訳実習など)

ました(表参照)。

「知識」については、介護保険制度に関する専門知識のほかに、高齢者に多い病気や医療と介護の連携などの知識も取り入れられました。「技術」については、ロールプレイで使うテキストを独自に作成する必要があったため、父の介護事例を基に「申請代行」「認定調査」「アセスメント(事前評価)」「サービス担当者会議(ケアプランの説明)」「契約」「サービス利用後のモニタリング」の場面を設定し、父の介護に実際かかわっていたいただいたケアマネージャーや介護サービス事業者に実際のやり取りを再現いただいたり、録画して、そのやり取りをベースにテキストを作成しました。「倫理」についてはですが、介護通訳は医療通訳以上にプライバシーに踏み込むことがあり、生活の場に入る機会も多く、通訳の業務

範囲から逸脱してしまう可能性が高いため、倫理は医療通訳以上に重要だと考えました。また、通訳者が倫理をしっかりとし身に付けていないと、介護通訳のシステムを保つこともできなくなり、通訳者自身の負担も大きくなってつづけてしまいかねません。そのため、「倫理要綱」も作成しました。

養成研修では、現役のケアマネジャーをはじめ、医師や外国人高齢者を受け入れている介護施設の管理者などの専門家を講師に招き、理論的体系的に研修を行いました。また、デイサービス施設での見学と体験、通訳実習などの現場研修、修了生に対するフォロー研



2015年度 研究助成プログラム
「助成題目」「敵」と友になる——タイ人児童と外国人児童が互いに理解を深め、ポジティブな姿勢をはぐくむための教育プログラムの開発——

多文化を受容し敬意を払うことに重点を置いた教育を

●ティティマディー・アーパッターノン (マヒドン大学アジア言語文化研究所)

多様性を増すタイの現状
私たちは多文化社会に生きています。タイもその例外ではなく、長い間いくつもの民族

の故郷であり続けています。近年では、ミャンマー、カンボジア、ラオスなど近隣国からの移住労働者によって、文化の多様性が深さを増しています。現在、タイ国内には

まだ走り出したばかりで、乗り越えなければならぬ問題がたくさんあり、取り組みの中で新たに発見した問題もあります。通訳者の身分や報酬の問題、費用の負担をどこに求めるか、介護施設のなかでの通訳のあり方といった問題の解決は、医療通訳以上に難しいと感じています。また、介護通訳の養成は中国語に留まらず、他の言語にも波及させていきたいと考えております。決して平坦な道ではありませんが、異文化背景を持つ高齢者が幸せな老後を過ごせるよう、今後も試行錯誤を繰り返しながら、外国人高齢者と介護の橋渡し役になつて頑張りたいと思います。

300万人以上の移民労働者がいるとされ、彼らを親に持つ児童の数はおよそ30万人に上ります。2005年7月、政府は閣議決定により、移民労働者の子どものみならず、無国籍の子どもたちも無償で公立学校に通うことを認めました。これにより、全ての子どもが親の在留資格の有無に関わらず12年間(高等学校レベルまで)の基礎教育を受けられることになりました。しかし、この政策が施行されて何年か経ち、多くの問題が生じてきています。私の調査によれば、タイ人児童とそうでない児童の間で誤解や対立が生まれています。本研究プロジェクトは、公立学校で学ぶ児

Towards Education that Emphasizes Acceptance and Respect of Cultural Diversity

Thithimadee Arphattananon

Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University

Today we live in a multicultural society. Thailand is no exception. Thailand has been a home for people of several ethnicities for a long time. Recently, the migration into Thailand of workers from neighboring countries, namely Myanmar, Cambodia and Laos, adds to the pool of cultural diversity. At present, data show that there are over three million migrant workers in Thailand. Among these, approximately 300,000 of them are children. In July 2005, through the cabinet resolution, Thai government allowed children of migrant workers as well as all stateless children, to attend Thai public schools for free. This cabinet resolution allows all children to receive basic education for twelve years (to high school level) regardless of their parents' legal status in Thailand. However, years after the policy took effect, many problems ensue. Data from my previous research show that the misunderstanding and hostile relationship between Thai students and migrant students is one among the problems.

This research project aims to reduce prejudice among migrant students and Thai students who enroll in Thai public schools and develop positive attitudes among them. In this project I work with teachers and administrators in three schools in Samut Sakorn province, where a large number of migrant workers reside, to design education activities that enable migrant students and Thai students to interact and reduce racial and ethnic tensions and then develop positive attitudes.

Up until present, I worked with teachers to create lesson plans and classroom activities that serve the purposes of this research project. In one of the schools, 90 percent of the students are Burmese, Mon and Karen and only 10 percent of students are Thais. Thus, in 1st grade social studies class, in the unit that talks about “Symbols of Thailand” which comprises Thai national flag, national anthem, Thai language and Thai food, we decided to add the elements of students' cultures--flags, national anthems, food, languages--into lesson plans.

As shown in the pictures below, in addition to Thai flag, the teacher presented to the class Burmese flag, and searched the internet for Karen flag and Mon flag. Surprisingly, this was the first time for many Mon and Karen students to see their flags. After that, the teacher asked the students to draw Thai flag and the flag of their ethnicities.

We did similar thing with national anthem, language and food; the teacher asked students to share their anthems, the greeting phrases in their language and the food they eat at home. By doing so, not only that migrant students and Thai students exchanged knowledge and cultures but it also enable migrant students to know their roots—their own cultures—as many of them were born in Thailand and some of them have never been back to their home country.

In another school, in 5th grade Art class, in the unit about “Art and Cultures” which talks about the influence of environment and culture on art, I worked with the teacher to plan for the activity. In this school, approximately 10 percent of students are children of hill tribes who migrated from the north to work in the province. The teacher asked hill tribes students to bring their traditional dresses to school and wear them in class. According to the teacher, these hill tribe students were shy to present or to wear their dresses to the whole class. Thus, we changed the plan by having Thai students wear the dresses while hill tribe students described the meaning of the decoration and colors of the dresses to their peers. Students' reflection of the activities is positive: migrant students expressed pride and joy of sharing their cultures to the class.

In the borderless world like today, education that emphasizes the acceptance and respect of cultural diversity should replace the education of nationalist policy that created the binary “us” and “them” notion.



①山岳民族の児童と民族衣装を着たタイ人児童のペア5組。②多くの児童はこの授業で自分たちの旗を初めて見た。③タイでは国歌を聞く時に起立します。あなたの国ではどうですか？④先生と一緒にクラス全体写真

① Five pairs of hill tribes and Thai students with traditional costumes. ② For some students it was the first time to see their flags. ③ In Thailand we stand up when we hear the national anthem. How about in your country? ④ Group picture with the teacher and the whole class.

文化を共有できる誇りや喜び

これまで、教員らと協力していくつかの学習計画や学級活動を作りました。ある学校は、児童の90%がビルマ族、モン族、カレン族のいずれかで、タイ人の児童は10%でした。そのためこの学校では、一年生の社会科で行われる「タイのシンボル」というタイの国旗や国歌、言葉や食べ物などについて学ぶ授業で、外国人児童の文化(国旗、国歌、食、言語など)についても取り入れることにしました。タイの国旗に加えミャンマーの国旗や、写

童が相互に偏見をなくし、相手に対してポジティブな姿勢を持つことを目的としています。具体的には、多くの移民労働者が住むサムットサーコーン県の3つの学校において、児童同士が交流を図り、人種や民族の違いから生じる緊張を緩和して、良好な関係を築くことができるような教育プログラムの開発を、教員やスタッフと協力して考案しています。

真にあるように、インターネットで見つけたカレン族やモン族の旗について説明しました。意外にも、多くのモン族やカレン族の児童たちは、このときはじめて自分たちの旗を見たといいます。そこで、児童たちにはタイの国旗と自分の民族の旗の両方を描いてもらいました。

国歌や言葉、食についても、それぞれの母国語による挨拶、家で食べている食事などについて発表してもらいました。そうすることで、児童たちが互いの知識や文化を学び合うだけでなく、タイで生まれ、母国に帰郷したこともない多くの外国人児童が、彼らのルーツ—彼らの文化—について知る機会となります。

できた山岳民族の子どもたちです。先生は彼らに民族衣装を学校に持ってきて授業で着てほしいと頼みました。しかし、山岳民族の児童たちは恥ずかしがり屋で、発表したり自分で自分たちの衣装を着たり、発表したりすることはできなかったそうです。そのため計画を変更し、タイ人の児童が衣装を着て、山岳民族の児童が衣装の装飾や色の意味について皆に教えるようにしました。児童たちの反応は好意的で、移民の子どもたちは、自分たちの文化を共有できたことに誇りや喜びを感じることができました。

今日のボーダレスな世界においては、多文化を受容し敬意を払うことに重点を置いた教育が、「私たち」と「彼ら」という、二元論的意識を作り出す国家主義的政策の教育にとつてかわるべきだと考えます。

*ティティマデー・アーパッタナーノン氏による本寄稿は、英文を日本語訳したものです。原文を左ページに掲載いたします。

なぜ私たちは 他者を支援するのか？

● 原めぐみ(和歌山工業高等専門学校助教)

トヨタ財団国際助成プログラムが2013年から2015年度までの3年間、助成テーマの一つとして掲げてきた「多文化社会」。これまでの助成事業の成果と知見を共有し、助成対象プロジェクト関係者同士のネットワーク構築と強化のために、2017年1月20日〜22日に国際ワークショップ&シンポジウム「多文化社会―国際的な人の移動と多様性のあるコミュニティ―」を開催いたしました。

本企画のコア参加者は、国内外からの国際助成プログラム助成対象者、共催団体である神戸大学国際文化学術推進センターの研究者、そしてトヨタ財団関係者の総勢30名でした。

2013年〜14年「グローバルな教育支援モデル構築プロジェクト」(代表：内田晴子氏)、2015〜16年「安全な移動プロジェクト」(代表：稲葉奈々子氏)に携わってきた原めぐみさんに、本ワークショップ&シンポジウム取材していただきました。

大阪・神戸視察から学ぶ 「多文化社会」の実践

現場視察は、全児童数約180名中4割以上が外国にルーツをもつという大阪市立南小学校訪問から始まりました。小学校が日々直面する児童や保護者の厳しい現実、そこから導き出された南小学校の取り組みを聴くことができました。それは、①対話型日本語学習などを取り入れた授業の見直し、②つながりを大切にしながら基本的な生活習慣の確立、③自文

は、各地域の移民政策に関する調査を行う研究者と、トヨタ財団国際助成プログラムのプロジェクトを実施してきた実践者、両者からの報告が行われました。基調講演では、神戸大学の坂井一成氏が「ヨーロッパ・地中海の移民問題とガバナンス」、フィリピン・スカラブリニ移民センターのマルジャ・アシス氏が「移民子弟と多文化家族のための包括的な社会の実現に向けて」という演題でそれぞれの研究成果を発表されました。

坂井氏は、EUにおける歴史・政治的なマクロレベルの分析結果と各国の最新の移民・難民問題について言及され、各国それぞれに移民・難民受け入れに対して葛藤があり、その中でグローバルレベルの枠組みが議論されているが、当事者の考えをどう反映させていくかが課題であると話されました。

アシス氏は、国際移動現象における子どもの流動性に着目し、本人や親の移住過程や、各国の移民政策によって、子どもの権利がはく奪される可能性を危惧する一方、アシス氏自身が代表の「ENABLE Kids Project」が、日本、韓国、フィリピンで行った調査結果からは、必ずしも支援体制が悲観的な状況ではないということがわかり、今後の発展に重要なことは、市民社会と国レベルでの送出国と受入国との連携であると強調されました。

続いて話題提供として、トヨタ財団国際助成プログラムの助成対象団体を代表して、神戸定住外国人支援センターの金宣吉氏と、メコン移住ネットワークの針間礼子氏による活動・成果報告があり、さらに本企画を共催した神戸大学大学院国際文化研究科より、米国の最新の動向について安岡正晴氏、同大国際連携推進機構より、西ヨーロッパの市民的統合方針についてウラディミール・クレック氏から研究



参加者による記念撮影

シンポジウム・パネル
ディスカッション



大阪市立南小学校の山崎校長(上)と、授業風景(左上)



シンポジウム終了後に開かれた中南米音楽会



コリアタウン

化理解を基盤とした多文化共生のクラスづくりというものでした。「自文化の大切さを伝えることは、国籍や文化的背景に関わらず、どの子どもにとっても良い環境を作ることに繋がる」という山崎一人校長先生の力強いお言葉に、心打たれました(山崎先生による寄稿は16ページ参照)。

次に、「コリアNGOセンター」の金光敏氏の案内により、在日コリアンの集住地域である大阪市生野区に位置する「コリアタウン」を視察しました。金氏は、自身の貧困や差別の経験、そして時代を超えてもそれらに苦しむ人々の問題、特に子どもの貧困が再生産されていることへの憤りが、活動の原動力になっていると話されました。また、「多文化社会」の実現に向けた運動の中で、オールドカマーから学ぶという視点が欠如していることを指摘され、参加者にとって、その言葉の重みを深く再考させられる機会となりました。

2日目の視察地であった神戸市「たかとりコミュニティセンター」では、センター常務理事である吉富志津代氏から、創設経緯と現在の活動内容について説明を受けました。もともと多様な人々が暮らす地域でしたが、阪神・淡路大震災の復興の過程で、出自に関係なく、隣人と助け合うという意識が生まれ、同センターに集うさまざまな団体の活動が活発になったとの報告には勇気づけられました。自立支援活動に長け、自治体との協働事業も盛んであることから、多文化社会のモデルケースが次々にここから生まれる理由が理解できました。

シンポジウムの開催

1月21日に一般公開で行われたシンポジウムで

報告がありました。

その後、神戸大学青山薫氏による進行のもと、基調講演者ならびに話題提供者6名によるパネルディスカッションが行われました。コミュニティの役割について、移民の合法・非合法という区分けの是非などについて、パネリストからの意見が聞かれました。本シンポジウムを通し、緻密な研究成果と実践が育んだ経験が共有され、地域や活動を超え、「多文化社会」の実現に向けたさまざまな意見交流が行われました。

参加者の 合同ワークショップからの学び

初日のワークショップにおいて、司会者の安里和晃氏(京都大学)が参加者に提示した宿題「なぜ私たちは他者を支援するのか? 自分たちの活動をどう社会に理解してもらうのか?」という質問が、最終日のワークショップでの主題となり、さまざまな団体や研究現場を持つ参加者による具体的な議論が行われ、今後の展開に向けた方策を出し合いました。

シンポジウムでも触れられたように、近年、欧米諸国では、移民・難民の受け入れに後ろ向きで、保守的な党派を支持する世論が増加しています。このような中だからこそ、日本を始めとするアジア諸国は、今まさに、さまざまなステークホルダー同士の協働による新たな方法を模索しながら、一つひとつの壁を乗り越えていく時期にきていると言えます。本企画を契機に、参加者同士のコラボレーション事業など、今後発展していくことが期待されます。

つなぐれ! 多文化共生の学校へ街へ 「ちがいがあふれる学校現場からの声」

◎ 山崎一人(大阪市立南小学校長)

前ページで紹介した国際ワークショップ&シンポジウム「多文化社会——国際的な人の移動と多様性のあるコミュニティ——」では、大阪市立南小学校を訪問しました。南小学校は多くの国や地域と関係の深い子どもたちが通う、国際色豊かな学校として全国に知られています。この南小学校の校長であり、放課後学習支援教室「Minamiこども教室」と連携して子どもたちへの支援を行っている山崎一人先生に、多文化共生の現状と、未来への希望についてご寄稿いただきました。

「ちがいがあふれる 大阪市立南小学校」

今、大阪ミナミの街は、アジアの人たちをはじめ世界各国の観光客でにぎわっている。観光客だけではない外国人居住者も増加の一途をたどっている。心斎橋を校区にする南小学校も全児童数約180名中の4割以上が外国につながりがある。関係する

が見られる中、学校では、さらに深く子どもたちの現状を見つめなおすことにした。すると、異文化社会で暮らすことの厳しき、特に外国につながるのある子どもたちの生活面や学力面の課題の深刻さが浮き彫りになった。そのため、「日本語指導をはじめとした個別指導の充実」や、「基本的な生活習慣の確立」、特に生活や学習の意欲につながる「固有のアイデンティティの育成」に焦点をあてた取り組みを強化した。

生き生きと輝く 多文化共生の学校に

しかし、学校の取り組みだけでは限界があると感じ、連携できる場所を探し回った。その時、地域のNPOが主催した外国人母子支援事業会議の中でその深刻さを共有することになる。それが、外国につながるがある子どもたちの学習支援と居場所である「Minamiこども教室」(以下、「教室」)の誕生へと繋がっていった。

「教室」が開設して3年半が経過した。関われば関わるほど、外国とつながりがある子どもたちや親が抱える厳しい現実が見える。そのためにも学校、行政、地域諸団体、支援団体、大学、領事館などと連携することが大切である。「教室」の開設には、実際に学習支援を行っているところ、ソーシャルワークを専門に活動しているところ、支援団体をコーディネートネットするところなどがあり、それぞれのノウハウを持ちよりネットワークを構築していった。

また、社会福祉協議会や区役所、連合町会の方の協力のおかげで助成金や寄付などが集まり活動資金を確保できたことや、会場として、地域にある「こども子育てプラザ」を提供していただくこともでき



元気な声が響く南小学校の休憩時間



世界の家の写真を見て、さまざまな生活環境があることを学ぶ



多文化を知る授業の一環として、校庭にゲルを建て馬頭琴を聴かせてもらった



学習支援の場であると同時に、子どもたちの放課後の居場所にもなる「Minami こども教室」

国も多く、ときには15か国に上る。校内においては、子どもがタガログ語や中国語の通訳をする場面があったり、宗教上「頭を触ってはダメ」「給食が食べられない」等文化の違いを感じるものが少なくない。グローバル社会が急速に進む中、さまざまな文化と自然にであい、豊かな感性を育む学校としてマスコミで紹介され注目されている。

子どもたちが抱える 厳しい現実

2012年、南小学校に赴任した時のことだった。その年の入学式から1週間ほど経った日に、新1年生の児童が死亡するという衝撃的な事件が起こった。外国人母子による実子刺殺自殺未遂事件である。この事件の真相は今でも分からないが、市の検証報告では、「母親が言葉や文化の違いから孤立感を深め、精神的に不安定になったのでは」と指摘している。

入学式の日にはタブレット端末をかざし、満面の笑みで我が子を撮影する母親の姿があったと聞く。三日後の始業式に玄関で道具箱や文具の入った袋を差し出し、「先生どれがいりますか?」とたどたどしい日本語で尋ねる母親の声が耳に残っている。当然、前日までは担任が電話で確認し、ルビのふられた手紙を渡していた。でも、一番わかるのは、直接指し示してもらったことなのだ。それから1週間も経たない日に、事件は起きた。親子に何かしてあげることができなかったのか? 悲しい現実の中、学校も地域も保護者も、そして、近くの同郷の人たちも考えた。

この事件を受けて、地域のコミュニティづくり支援事業の立ち上げや、保護者間の連絡網強化の動きがあった。入学式の日にはタブレット端末をかざし、満面の笑みで我が子を撮影する母親の姿があったと聞く。三日後の始業式に玄関で道具箱や文具の入った袋を差し出し、「先生どれがいりますか?」とたどたどしい日本語で尋ねる母親の声が耳に残っている。当然、前日までは担任が電話で確認し、ルビのふられた手紙を渡していた。でも、一番わかるのは、直接指し示してもらったことなのだ。それから1週間も経たない日に、事件は起きた。親子に何かしてあげることができなかったのか? 悲しい現実の中、学校も地域も保護者も、そして、近くの同郷の人たちも考えた。

その他にもロールモデルになる弁護士や外国にルーツをもつ大学生、社会人にゲストティーチャーとして関わってもらったりもした。学校の教育活動においても多文化共生の授業を推進するため、保護者や地域の方にもゲストティーチャーとして積極的に関わっていただいた。正に社会総がかりだ!

地球的規模の視野で 世界をつなぐリーダーに

南小学校には、「ちがいがあふれている。この「ちがいを」を当たり前のように入れ、「ちがいを」を排除の対象とするのではなく、「ちがいがあっても違和感のない、むしろ「ちがいに」気づくことで豊かさを感じ、「ちがいがあふれる」ことで感動を共有する子どもに育ってほしい」と願う。将来、大阪ミナミで育った子どもたちがさまざまな課題を乗り越え、地球的規模の視野で世界をつなぐリーダーとして活躍してくれる姿を思い浮かべる。

2月の夕刻、「教室」に参加する厳しい課題を抱えていた卒業生が職員室を訪れ、高校に合格したと報告があった。職員室中に歓声が響き渡った!



2017年度事業計画

トヨタ財団の本年度助成プログラムが目指す「事業計画」が決まりました。その概要をお知らせいたします。

トヨタ財団は、昭和49(1974)年の設立以来、生活・自然環境、社会福祉、教育・文化等に関する研究や事業に対してさまざまな助成を行ってまいりました。また、その実施に際しては、「先見性」、「市民性」、「国際性」の3つの条件を抛り所としてきました。

そこで平成29(2017)年度も、「社会が直面する困難な課題に向き合うための考え方や方法論を探究する」研究助成、「高齢化、少子化、移民、アートなど、アジア各国の多領域における共通課題について互いに学び、解決策を見出す」国際助成、「地域の課題解決に向けた仕事づくりとその担い手を育成する」国内助成の3プログラムを中心として、新たな社会課題の芽を発見し、その解決を目指す取り組みに対する支援を行います。

本年度の事業方針は、次の2点を重点実施項目といたします。

①メインとなる3助成プログラム(研

究・国際・国内)については、予算規模を前年と同じく各1億円とすることにより、当財団らしい助成規模を維持する。但し、2011年の震災以来6年の間継続してきた東日本大震災被災地の復興支援の取り組みについては、イニシアティブプログラムの枠組みにおいて、これまでの振り返りと評価を行うこととする。

②また、イニシアティブプログラムの枠組みの中では、前年と同じくNPOの基盤強化などの非営利セクターの発展に資するプロジェクトの支援や、平成27(2015)年度に開催した「アジア非営利セクター国際会議」のフォローアップ助成も引き続き実施する。

詳細は、それぞれのプログラムが公募を開始した際にウェブサイトをご覧いただきたいと思っております。ここでは募集概要のみ記します。本年度の事業計画をご理解いただくとともに、応募を検討される際のご参考となれば幸いです。

研究助成プログラム

●募集概要

「基本テーマ」

『社会の新たな価値の創出をめざして』
地球規模の課題や世代を超える課題など、これからの社会が対応を迫られる困難な課題に向き合うための基本的な考え方や方法論を探究する、意欲的な研究プロジェクトを支援します。

「助成枠」

- (A) 共同研究助成
- (B) 個人研究助成

「募集時期」2017年5月1日～9月8日

「助成予定金額」総額1億円

(A) 共同研究助成…総額約8000万円

「上限額400万円/件(2年間の場合は800万円/件)」

(B) 個人研究助成…総額約2000万円

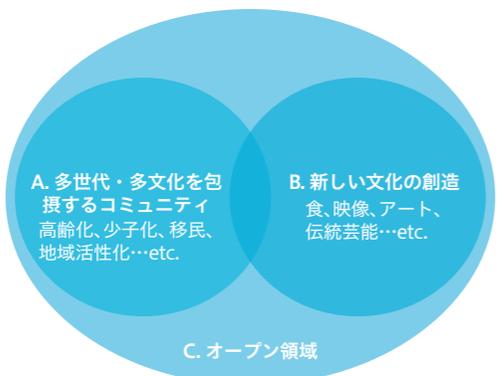
「上限額100万円/件(2年間の場合は200万円/件)」

「助成期間」2018年5月1日から1年間もしくは2年間

国際助成プログラム

助成プログラムとしては、2016年度に改訂した基本テーマと趣旨を継続し、日本を含む東アジアと東南アジアの共通課題に対する「2国以上の地域実践者による国を越えた現場交流・課題解決」への助成を行います。

また助成領域も前年度と同じく(A)多世代・多文化を包摂するコミュニティ、(B)新しい文化の創造、(C)オープン領域の3領域を継続し、応募者への本テーマの浸透とプログラムとしての深化を図ります。



■ テーマイメージ

●募集概要

「基本テーマ」

『アジアの共通課題と相互交流——学びあひから共感へ——』

「サブテーマ」

- (A) 多世代・多文化を包摂するコミュニティ
- (B) 新しい文化の創造
- (C) オープン領域

「対象国」東アジア・東南アジアの国や地域
東アジア…中国、香港、マカオ、台湾、韓国、モンゴル、日本

東南アジア…ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、東ティモール、ベトナム

「対象プロジェクト」対象国の2国以上における、各サブテーマについての活動及び提言や作品の制作

「企画書受付期間」2017年4月4日～6月20日

「助成予定金額」総額1億円

「助成期間」2017年11月1日から1年間もしくは2年間

国内助成プログラム

本年度も引き続き「未来の担い手と創造する持続可能なコミュニティ——地域に開かれた仕事づくりを通じて——」をテーマとして公募を実施します。

昨年度同様、事業実施に向けた調査への助成を目的とした「しらべる助成」と、地域課題解決とその担い手育成をめざす事業への助成を目的とした「そだてる助成」の二つの領域を設定します。また過去の助成対象者を中心に、これまでの活動の実績から得た知見に基づき政策提言を通じ、社会の仕組みそのものを変えることをめざす事業への助成を検討します。

昨年に引き続き、NPOの組織基盤強化を図ることを目的としたトヨタNPOカレッジ「カイケツ」を開催する他、助成対象者の事業の成果をより高めるために、マネジメントや調査について学ぶ講座・ワークショップを開催します。

●募集概要

「基本テーマ」

『未来の担い手と創造する持続可能なコミュニティ——地域に開かれた仕事づくりを通じて——』

若い世代とともに地域課題解決につながる仕事づくりに取り組む事業や、そうした仕事の担い手となる人材を育てる事業を支援します。仕事が地域で育つことにより、それぞれの地域に適した持続可能で人々が幸せを実感できるコミュニティが築かれることを期待します。

「助成領域」「しらべる助成」、「そだてる助成」

研究助成・国内助成プログラム プロジェクト一覧 2016

2016年度に採択された研究助成プログラム(共同研究助成17件、個人研究助成23件)と、国内助成プログラム(し
らべる助成16件、そだてる助成10件、東日本大震災特定課題7件)のプロジェクト一覧です。

*掲載内容は2017年3月23日時点の情報です。各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

研究助成プログラム【共同研究助成】

代表者氏名	題 目	助成期間
セバスチャン・ルシュパリエ	富の再分配、収入格差、社会的価値観、福祉制度に対する国ごとの考え方に関する考察	2年
クラウドディア・アスタリア	戦後の謝罪に果たすメディアの役割 — 市民社会は和解にどう貢献できるのか —	2年
ウィリアム・アレク	「人の移動」を語り合うメッセージング — 変化する世界で移民や人の移動を語る新たなサービスの研究と創設 —	2年
山田 智恵里	モンゴルのウラン鉱床近郊の住民主体被ばく対策活動 — 有効な支援手法や活動強化要因の検証	2年
アンソニー・エリオット	高齢者向け介護ロボットの検証 — テクノロジーを利用した高齢者介護と福祉の実現に向けて —	2年
当山 昌直	消失の危機にある琉球の生物文化の記録保存から「生物文化遺産」創出の道を開く	2年
中山 幹康	太平洋島嶼国からの気候変動難民が移転先で生活を円滑に再建するための施策 — 難民とホストコミュニティ住民の融和に向けて —	2年
木村 豊	戦争災害前後の日常生活の記憶継承に向けたアクションリサーチの実践的研究	2年
サビーネ・アインウィラー	インターネット上のいやがらせや迷惑行為に対する組織的な取り組み — プラットフォーム・プロバイダーのコメント投稿ポリシーに関する国際比較 —	1年
由井 秀樹	母子保健における「標準化像」の形成過程に関する歴史的研究	2年
サンドラ・マニユエル	モザンビークの料理史 — 郷土料理のレシピとモザンビークの伝統文化 —	1年
蓮 行	地域社会における多世代共創型演劇ワークショップによる効果の総合的・定量的評価	2年
フリアン・サラサー	ディアリタ先住社会の持続可能な開発戦略 — アンデス東南地域における文化遺産の調査および保護 —	2年
木場 紗綾	東南アジアにおけるコミュニティ・ポリシングの実践から学ぶ — 治安改善および警察改革へのインパクトの検討 —	2年
横山 泰三	自助グループにおける哲学的対話の効果に関する国際比較研究	1年
大賀 哲	企業・行政・NPOの協働による社会的責任の再構築と価値の共有 — CSR(企業の社会的責任)の日韓比較研究 —	2年
池崎 澄江	高齢者施設のエンドオブライフケアに関する日韓泰国際比較研究 — アジア型教育プログラムの開発に向けて —	2年

研究助成プログラム【個人研究助成】

代表者氏名	題 目	助成期間
ファルハナ・フェルドゥース	環境デザインと健康 — 認知症患者のケア施設において環境デザインが果たす役割 —	2年
鈴木 紀之	市民科学によるオープンデータを用いたグローバルな生物多様性の評価	1年
鈴木 政広	修復的司法における対話メカニズムの解明	1年

【募集時期】2017年9月1日～9月30日
(予定)

【助成予定金額】総額1億円

しらべる助成…上限額100万円程度/件
そだてる助成…上限なし

【助成期間】

しらべる助成…2018年4月1日から
最長1年間
そだてる助成…2018年4月1日から
2年間

イニシアティブプログラム

一般枠

NPOの基盤強化など、非営利セクターの発展に資するプロジェクトに対する助成を行うとともに、他組織との共同助成、民間財団として支援の意義が大きいと考えるプロジェクトなど、本プログラムの本来の目的である、将来の新しいプログラムの開発に資するためのプロジェクトを積極的に発掘していくこととしていきます。

東日本大震災特定課題

2016年度の募集に対する応募件数が10件と少数に留まったことや、自治体による復

興(災害)公営住宅におけるコミュニティ形成への補助金などが創設されはじめていることなどから、3年間続けてきた「コミュニティ形成支援プログラム」は一定の役割を終えたと判断しました。
2017年度は、この「コミュニティ形成支援プログラム」の振り返り・評価を行うことで、将来の災害に備えるとともに、発災から丸6年を経た被災地における現在の課題を抽出することを目的とした調査事業を非公募の助成により実施します。

社会コミュニケーションプログラム

本年度も引き続き、全プログラムを対象に、助成プロジェクトの成果や手法などをインパクトのある形で社会に発信・普及させることを目的とします。

また過去の助成対象者を中心に、これまでの活動の実績から得た知見に基づく政策提言を通じ、社会の仕組みそのものを変えることをめざす事業への助成を検討します。具体的には、モニタリングなどを通して候補となるプロジェクトを選定し、助成対象者とプログラムオフィサーが連携して効果的な社会への発信を図ります。

公募情報 2017年度 国際助成プログラム

[テーマ]
アジアの共通課題と相互交流 — 学びあいから共感へ —

[企画書受付期間]
2017年4月4日(火)～6月20日(火)

国際助成プログラムでは2017年度の公募を開始いたしました。募集要項等のプログラムの詳細、応募方法については当財団ウェブサイトをご覧ください。皆さまからのご応募をお待ちしております。

研究助成プログラム【個人研究助成】

代表者氏名	題 目	助成期間
鈴木 愛	バングラデシュ北東部の湿地におけるスナドリネコと人と軋轢緩和に関する研究 ― 軋轢の基礎調査と軋轢緩和における住民参加型調査の可能性 ―	2年
エヴァン・エリース・イーストン-カラブリア	「お荷物」から「恩恵をもたらす人びと」へ ― カンバラとベルリンにおける難民主導型人道支援の事例 ―	2年
ポール・グリーン	タイ・チェンマイにおけるデジタルノマドとその社会的責任	1年
牧野 冬生	カンボジアにおける「慰霊の空間」と負の記憶の継承儀礼に関する研究 ― 「負の出来事の当事者性」の把握とアクティブデータベースの構築 ―	2年
高村 加珠恵	日本とカナダにおける不法滞在者収容の実態とその人権擁護 ― 両国間の比較分析 ―	2年
澤崎 賢一	「暮らしの目線」に見るフィールド研究の感性 ― 映像メディアを活かす超学際研究の表現形の探究 ―	2年
シャフィ・ムハンマド・タレク	半島マレーシアにおける気候・社会経済要因とデング熱との関係性の考察	1年
ヨー・カー・シー	BRCA 遺伝子変異を持つ女性の乳がん発症を防ぐための意思決定方法に関する新しい価値の考察	2年
今井友樹	自然と人の中にある「境界」をめぐる ― 心意伝承に新たな可能性を拓く ―	2年
渡邊 悟史	ヤマビル対策のフィールドワークを通じた人間と動物の「共生」概念の再構築 ― トラブルに関わり続けるプロセスとしての「共生」 ―	2年
竹原 健二	「イクメン」はわが国の父親のありようの理想像といえるのか ― 「イクメンブーム」がもたらした影響とそれにより失った何かを問い直す ―	2年
平山 亮	性的マイノリティとして老いること ― 多様な生/性を受け容れる高齢社会の実現に向けて ―	2年
土屋 一彬	なぜありふれた自然環境を守るのか？「関係価値」評価メカニズムの解明	1年
新保 奈穂美	多文化共生型コミュニティガーデンの社会実装に向けた実証研究	2年
仙波 由加里	生殖補助技術で形成される家族についての研究	2年
岡部 正義	教育開発と「逆向きジェンダーギャップ」に関する社会経済学的研究 ― フィリピンの事例 ―	2年
西 麻衣子	農村景観の多層的ガバナンス ― 日本の農地賃借における価値観の役割 ―	1年
陳 愛国	水環境の再生・保全における地域住民主体型の推進体制の構築に関する日中比較研究	2年
島田 千穂	治療優位の価値の再考 ― 高齢者の急性期医療の決定に伴う医療者のジレンマから ―	2年
中川 亜希子	環境要因によるため池環境（ため池の生物多様性にとっての環境）の評価方法の構築	2年

国内助成プログラム【しらべる助成】

代表者氏名	題 目	活動地域
中川 奈保子	インフォーマル支援のリアル ― 実践から深める地域支え合いの新たな形	北海道
男澤 誠	企業の廃材・端材の有効活用 ― 廃材・端材は学校の教材になる！	神奈川県
杉田 恵子	コンビニバス運営 ― 買い物弱者を支えるバス停コミュニティ創生の可能性	北海道
陣内 雄次	双方向の居場所づくり ― 関係性の貧困解消へ	栃木県
中村 正	福祉現場で企業人が活躍 ― 副業規制緩和による新たな就労機会の創出	京都府
北村 隆幸	U ターンの問題構造見える化 ― 関の若者が戻って住み続けられるまちへ	岐阜県

代表者氏名	題 目	活動地域
長田 容子	雑穀の村復活への可能性調査 ― 農家と交流者とのモデル的栽培体制の構築	山梨県
谷井 貞夫	地域の「知恵の実」拾い ― 空き家利用・共生型地域福祉拠点整備調査	北海道
大山 路子	持続可能な自活する地域へ ― 離島コミュニティの世代間バトンリレー	広島県
井栗 秀直	芦生集落まるごと資源調査 ― 多様な人が往来する環境保全型地域の創出へ	京都府
廣畑 佐知子	人と猫の共生を図る地域猫活動 ― 新しいコミュニティ作りを目指すステップ	岡山県
市村 憲一	孺恋コミュニティ物流構築 ― 過疎・中山間地域で生活支援物流システム	群馬県
遠山 真治	未来のふるさとづくり ― 空き家と棚田を活用した準村民制度の検討	新潟県
中村 祥子	「GH」+「アパート」 ― 自閉症スペクトラム者の住居の選択肢調査	宮城県
伊藤 次郎	若者自殺対策の担い手になりうる地域の社会資源調査	関東
布田 剛	被災者支援員という地域人財 ― 支援員の役割が住民に与えた影響と可能性	宮城県

国内助成プログラム【そだてる助成】

代表者氏名	題 目	活動地域
石沢 達雄	「サンソンプロジェクト」 ― 次世代につなぐ里山のなりわいづくり	秋田県
守随 智子	若者と動物の共生事業 ― 困難を抱える若者と目指す「殺処分ゼロ」	愛知県
平 由以子	ローカルフードサイクリング ― 生ごみを野菜にかえるサービスの構築	福岡県
薬師 実芳	LGBT の子どもも育つ東京 ― 学校で支援 / 理解普及を担う教職員養成	東京都
高橋 由佳	地域循環型移住プロジェクト「多様な人材が継承するまちづくりへの挑戦」	宮城県
今井 紀明	地域に高校生のつながりを ― 定時制高校中退予防プロジェクト	大阪府
呉 哲煥	地域の通いの場の担い手育成 ― 松戸の介護予防を促進するコミュニティの力	千葉県
横田 能洋	定住化支援と災害からの復興 ― 保育、仕事、居住の改善と異文化交流の促進	茨城県
橋本 大吾	高齢者の健康見守りサービス～潜在介護士が離れて暮らす親子を支える	宮城県
瀬下 翔太	教育型下宿での観光業再生 ― 学びと探究による地域人材育成を目指して	島根県

国内助成プログラム【東日本大震災特定課題】

代表者氏名	題 目	活動地域
庄司 則雄	名取美田園北町内会コミュニティづくり事業「新たなコミュニティを育て、世代交代しながら住み続けられる地域の創出をめざす」	宮城県
柴田 滋紀	プレーパーク活動を通じた子どもを中心においたコミュニティ作り	宮城県
後藤 一磨	南三陸町復興公営住宅自治会 運営力向上支援事業 ― 自治会が地域資源を活かしながら自立し、たくましく活動を展開していくために	宮城県
飯塚 正広	災害公営住宅における居場所の創出にむけた共用部の利用促進プログラム	宮城県
増田 敬	石巻市蛇田地区復興公営住宅における「これは使える!! 集会所」コミュニティ形成プログラム	宮城県
白旗 成典	「種」で生まれる人のつながりプロジェクト	宮城県
鶴浦 章	出張スマートクラブ ― 災害公営住宅における健康づくり・仲間との交流の場づくり	岩手県



【国際助成プログラム】
WINGSForum2017に参加して

✕ キンコシティで2月22日から24日にかけて開催されたWINGSForum2017に参加してきました。

主催のWINGS (Worldwide Initiative for Grantmaker Support) は、非営利セクターを支援する組織がメインの世界規模のネットワークで、同 Forum にはWINGSに加盟していない組織からでも参加可能です(トヨタ財団も非加盟)。今回は44か国、167の組織から約300名が集まりました。大型かつグローバルな財団だけでなく、各国内のコミュニティ財団や市民社会ネットワーク組織、大学・研究機関などが一同に会し、意見交換する他にはない機会となりました。

全体会のパネルディスカッション

分科会からなり、難民問題やSDGs等の国境を超えた課題に対して、財団等の支援組織の

役割や、各地での興味深い取り組みについて議論されました。各国で見られる排外主義の動き、市民社会の活動に対する抑圧という事象が喫緊の課題であり、非営利セクター全体としてこれに対応すべしという危機感が、会議を通して参加者間で共有されていました。



分科会の様子

オ フィンシャル・プログラムと並行して個別の会合も持たれ、私は大型の財団や市民社会支援組織のみの招待制サイドイベントに参加しました。発言者の名前を伏せるチャットハウス・ルールのもとで幾分か緊張感が漂うなか、フィランソपीと市民社会の基盤(Infrastructure)をテーマに、議論が行われました。そこでは、アメリカの有力な財団が非公式に集まり、排他的な動きや市民社会への抑圧等に対応するための方策を議論している例などが紹介されました。アメリカの大型財団関係者による、市民社会には財団も含まれる」という発言が印象に残っていますが、財団、中間支援組織、NGOも、排外主義に連携して対応するためのグローバルなプラットフォーム構築を試み始めているようです。

日本に比べると、このような肌感覚を持つ機会は多くありません。WINGSForumは、各国の非営利セクター関係者との議論のなかで世界の大きな流れを捉え、何がアジェンダになっているかを考える場となりました。(利根)

助成機関等の支援者側の理解不足と支援体制の未整備等が課題となっていることが共有されました。また制度については、当面の間は統合せず、それぞれの活動形態にあった法人格を「選べる」ことが良いのではないかという意見が数多く聞かれました。

委員会では、今後も継続して、同趣旨のフォーラムを各地で開催されるそうです。今後の開催場所は未定ですが、機会がありましたら、ぜひお近くの会場へご参加ください(開催希望地域も随時受付中とのことです)。
※実態調査の詳細については、日本NPOセンターウェブサイト掲載の、「非営利法人格の選択に関する実態調査報告書」をご覧ください。(鷲澤)



【国内助成プログラム】
「しごとづくりは、つながりづくり、地域づくり」に参加して

山 形県鶴岡市で2月25日に開催された、鶴岡ナリワイプロジェクト(2014年度国内助成プログラム助成対象)の成果報告会に参加してきました。

鶴岡ナリワイプロジェクトは、「自ら動く人

を地域に増やす」ことを目的に女性が「地域にいいこと×自分のできること・好きなこと」でナリワイをつくるプロジェクトです。当初2年間に25名の「ナリワイ女性」を育て、地域から新しい働き方を提案することを目標としていました。結果として2年間で31名のナリワイ女性が誕生し、ナリワイ女性が高校等で「働き方」について講演するなど働き方の提案も実施されました。

報告会は、ナリワイ女性、行政担当者、県外のアドバイザーによる2年間の振り返りを参加者と共有する場として開催されました。ナリワイ女性の一人、菅原明香さんは、米国の大学の芸術学部で学んだ経験を活かし、英語とアートに関するナリワイに挑戦しています。同じナリワイプロジェクトの仲間数名と療養中の人にアートを通じた癒しを提供する「ホスピタルアートプロジェクト」も立ち上げました。ナリワイを通じて横並びを重視する地域で自分らしく生きていける可能性を感じているとお話されていたのが印象的でした。

プロジェクトのアドバイザーを務める広石拓司氏(株式会社エンパブリック)は、ナリワ



ナリワイプロジェクトとして制作された作品



【イニシアティブプログラム】
「非営利法人格の選択と制度を考えるフォーラム in 大阪」に参加して

2 月24日、大阪市の「市民活動スクエア『CANVAS谷町』」にて、非営利法人選択に関する実態調査委員会(以下、委員会)が主催する、非営利法人格の選択と制度を考えるフォーラム in 大阪「社会課題・地域課題に取り組み組織が、選ぶべき法人格は何か? 非営利法人格に関する制度はどうあるべきか?」に参加してきました。

トヨタ財団では、同委員会が実施する実態調査を2014年から2年間、非公募型の「イニシアティブプログラム」で助成を行ってきました。今回のフォーラムは、それらの実態調査で明らかになったことを、各地のNPOや行政関係者、中間支援組織をはじめとするさまざまな方々に共有し、共に非営利法人格の選択方法や制度について議論することを目的に開催されました。

実 態調査の結果からは、多くの団体が「認定」や「公益」の法人格を取得する際に期待したメリットと現実とのギャップに悩んでいる様子が見て取れ、政府や中間支援組織、

イプロジェクトについて「自分が得意なことや好きなことは一人ではなかなか発見できない。仲間に出会えたことで潜在的な力を発揮することができた。そのような「場」を提供することが地域に必要」と語っていました。最後には、参加者から自分を取り組みたいナリワイについてたくさんの提案があり、次へとつながる場となりました。(喜田)



A to Zが世界を変える!
●発行: 綾部ローカルビジネスデザイン研究所
●発行者: 塩見直紀
●価格: 500円 + 税

2 014年度国内助成プログラムの助成対象である「集落多様性×使命多様性×新しい組み合わせ」未来の仕事! —綾部型ローカルビジネスデザインプロジェクト(代表者: 綾部ローカルビジネスデザイン研究所塩見直紀氏)の一環として作成されたミニブックシリーズの三冊目「A to Z」が世界を変える!」が発行されました。

ご関心のある方は、綾部ローカルビジネスデザイン研究所まで直接ご連絡ください。このミニブックレットシリーズの売上を基金とし、綾部の地域資源を活かして起業を志す若い綾部市民を応援する「綾部ローカルビジネスチャレンジ基金」が2016年秋、創設されました。



メキシコシティで開催されたWINGSForum 2017のレセプションの一コマ[H.T.]

【編集後記】

LAST WORD

●遅ればせながら、ハンセン病回復者を樹木希林さんが演じた映画『あん』を観ました。2015年の作品ですからご覧になっている方は多いと思いますが、心に刺さる映画でした。ハンセン病や回復者に対する一般の人の偏見を浅田美代子さん（ご自身は、犬猫の殺処分ゼロを目指す活動に携わっていらつしやる心優しい方です）がわかり易い形で演じています。見ていて、これは自分だ、自分も同じことをすると思いました。ハンセン病に限らず、障がい者に対する差別や偏見、同和問題、排外主義など色々な問題について考えさせられました。

●国際助成プログラムでは2013年度から3年間、「多文化社会と国際的な人の移動」および「アジアにおける高齢化」の二つのテーマを重点領域として助成を行ってきました。特集やジャーナルコーナー（27ページ）でも紹介したとおり、年明けから両テーマに関して神戸（1月・多文化）とソウル（2月・高齢化）において現場訪問、ワークショップ、公開シンポジウムという一連の取りまとめ企画を実施し、慌ただしく日々を過ごしました。

●前号のJOINTに対していただいたご感想です。
☆「スーパーマンと有機農業論」大変興味深く読んだ。今までなかった社会形態に突入しているのだとわかってはいるつもりだったが、ガツンときた。
☆グローカルの実践、共感しました。
☆雪景色とウメモドキが素晴らしいですね。鳴子温泉というところに行ってみたくまりました。
24号は「多文化」をテーマにしてみましたがいかがでしたか。今号に対しても同封のハガキにてご意見、ご感想をお寄せください。[MN]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS
JOINT
ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいは同封のハガキにてご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.24
発行日 2017年4月14日
発行人 伊藤博士
編集 トヨタ財団 広報グループ
発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] http://www.toyotafound.or.jp/
編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。



On The Journey
—旅の途上で—

国際助成プログラムのシンポジウムで訪れた韓国の屋台で売っていたたまごパン(本誌 P.27参照)
●写真撮影： 笹川みちる



公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



UD
FONT

